

令和7年度第2回 静岡市立登呂博物館協議会 会議録

1 日 時

令和8年2月18日（水）午前10時00分から正午まで

2 場 所

静岡市立登呂博物館 1階登呂交流ホール

3 出席者

（協議会委員）

海瀬安紀子 委員、田宮縁 委員、野田修 委員、藤田友子 委員、堀切正人 会長、丸山真史 委員、村野正景 委員（計7名）

（事務局）

岡村館長、清水主任主事、松原主任主事、渡邊主任主事、鈴木主事（計5名）

（欠席者）

池田水穂子 委員、木村貴子 委員、鈴木健介 委員（計3名）

4 傍聴者

0人

5 議 題

- （1）令和7年度の事業報告
- （2）令和8年度の事業予定
- （3）議題「登呂博物館リニューアルに向けて」

6 協議内容

0) 開会・会長及び職務代理者の選任等

【開会】

事務局（松原主任主事）より開会宣言があり、出席者7名で定足数を満たし会議が成立した旨、傍聴希望者がいないため傍聴者0名である旨の報告があった。

【館長挨拶】

岡村館長より、令和7年度の企画展開催時の観覧者数は前年比で増加傾向にあること、企画展・イベントに加え写真公募や教員との交流会等の新規取組を実施したこと、次年

度も企画展やイベント等の博物館活動により登呂遺跡・登呂博物館の魅力を発信していく旨の挨拶があった。

【会長選任・職務代理者】

委員の互選により堀切委員を会長に選任し、堀切会長より職務代理者として丸山委員が指名された。

【議事録作成の周知】

事務局より、試験的にAIを活用して議事録を作成するため、発言時に氏名を名乗るよう依頼があった。

(1) 令和7年度の事業報告

【事務局説明】（松原主任主事）

・令和7年度の入館者数・観覧者数等の詳細は、令和8年度第1回協議会で館報と併せて報告する旨説明した（本日は1月末までの報告）。

・企画展（春『しずおかタイムトラベル』、夏『いせきのZOO』、秋『大昔へのまなざし』、冬『駿河国分寺跡』）の概要と、関連講座・講演会・ワークショップ等を紹介した。

・暑熱対策として、従来8月第1週に実施していた体験イベントをGWに移行し『とろむら体験Week!』として実施した。GWに体験イベントが無かったため来館者の受け皿となった旨説明した。

・水田事業の課題（稲の食害）への対応として、ジャンボタニシ拾いをイベント化した経緯を説明した。

・石器づくりは、当日受付のため開館前から並ぶ状況があり、先着に有利な市内の方に参加が偏る課題があったため、電子申請等を導入し事前予約化した。実施時期もイベント重複等を踏まえ10月から9月へ変更し、県外からの参加者の増加が見られた旨説明した。

・夜間開館・ライトアップ等、博物館を非日常的に使うユニークベニューでは、通常層以外の獲得を試み、例年より多数の入館者・観覧者があった旨説明した。

・学校連携（市政出前講座、南部小『博物館ジャック』等）や大学連携（静大生のミュージアムジャック、情報コーナーでの大学連携展示）等を報告した。

【質疑】

（堀切会長）事業報告について質疑を求めた。

（村野委員）

- ・ジャンボタニシ拾いの参加が多かった理由（想定・背景）について質問した。
- ・石器づくりを当日受付から事前受付に変更したことで県外参加が増えたロジックについて質問した。

（事務局：松原主任主事）

- ・ジャンボタニシ拾いは初の試みで、薬剤等も用いたが食害が大きく、苗代づくり等も試したが明確な成果が得られなかったため『取ってもらう』方向へ転換しイベント化した。参加者がいない可能性も想定したが、探す行為がアトラクション的に受け止められ、親側からは『泥で汚れず自然に触れられる』点も好評だった。重量に応じたプレゼントを設定し、在来タニシとの違いも説明した結果、従来と違う体験として受け取られたと考える旨回答した。
- ・石器づくりは電子申請導入により事務負担が軽減した。事前申込化で『開館前から並ぶ』必要がなくなり、近隣の方に有利になる状況が緩和され、遠方からも予定を立て参加しやすくなったことが県外参加増につながった可能性がある旨回答した。

（村野委員）

- ・事前受付（電子申請）の導入はアクセシビリティ向上だけでなく事務負担軽減にも有効である旨補足した。

（丸山委員）

- ・高校生・大学生の来館者が増加しているか質問した。
- ・ジャンボタニシ拾いの参加者の年齢層について質問した。

（事務局：松原主任主事）

- ・中高生の来館は感覚として大きな変化はないが、城南静岡高校のカフェ出店（計7回）を継続し、同級生が顔を出す等、少しずつ広がりがあると感じる旨回答した。
- ・ジャンボタニシ拾いは小学生が最多であった旨回答した。

（丸山委員）

- ・高校生が主体となる取組があると高校生の来館につながり、結果として大学生層にも波及し得る旨意見を述べた。

（岡村館長）

- ・大学生層については田宮委員の大学連携（ミュージアムジャック等）で、課題のために何度も調べに来る学生がいる。『来るのを待つ』のではなく『種をまく』ことが重要だと感じる旨発言した。

(田宮委員)

- ・自身の授業（生涯学習演習：選択）では人数は限られるが、イベントで外部の人からの質問が入ることで学生の企画がブラッシュアップされる旨述べた。
- ・大学の必修科目（社会教育法）で登呂博物館と茶の都ミュージアム（島田市）のいずれかをレポートする課題があり、登呂を選ぶ学生も多かった可能性がある旨述べた。

(事務局：松原主任主事)

- ・情報コーナーで通年展示を継続していること、10月から國學院大學との連携で静岡考古館関連資料を紹介した展示も大学連携として位置付けられる旨補足した。

(野田委員)

- ・南部小学校長としての経験から、総合的な学習として登呂を活用する取組が広がることへの期待を述べた。
- ・移動手段（バス確保・費用）の課題が大きい一方、徒歩圏内の学校（例：富士見小、宮竹小等）では活用余地が大きい旨述べた。
- ・学習指導要領のキーワードは『探究』であり、課題設定・情報収集・まとめ・発信と登呂での学びは親和性が高い旨述べた。

(事務局：松原主任主事)

- ・南部小での取り組みを富士見小・宮竹小へも波及できるように検討していくと回答した。
- ・高松中学校では中学1年生の見学の継続に加え、歴史博物館と共同で総合学習を支援し、修学旅行のルート決め等も支援した旨補足した。

(田宮委員)

- ・ミュージアムジャック等の学びには『遊び心』が基盤として重要であり、幼児期から小学校への接続を見据え、活動の狙い（ねらい）を明確にし、カリキュラムを組む必要がある旨述べた。
- ・泥に触れる、コメを食べる等の体験を子ども主体で行い、その感覚を小学校段階の学びにつなげることが重要である一方、方向性を誤ると逆効果になる可能性もあるため狙いの整理が必要と指摘した。

(2) 令和8年度の事業予定

【事務局説明】（松原主任主事）

- ・令和8年度も主要イベントは継続する方針である。

・企画展は春夏秋冬4回を予定し、春は『しずおかタイムトラベル』、夏は昭和100年を見据え登呂遺跡の発掘調査成果・記録とデジタルアーカイブ成果を紹介する展示、秋は登呂遺跡と復元建物、冬は機織りをテーマとする展示を想定している旨説明した。

(3) 議題「登呂博物館リニューアルに向けて」

【事務局説明】（松原主任主事）

・これまでの協議会での議論を整理し、今後の取組を（1）登呂遺跡・博物館に関わる人々やコミュニティの拡大（現状を活かす）と（2）登呂博物館のリニューアル（課題を改善）の2本柱に整理した。

・本会ではリニューアルのうち、常設展示の現状把握、空気環境、デジタルコンテンツを中心に意見を伺いたい旨説明した。

【常設展示見学】

（事務局：渡邊主任主事）の案内により常設展示室を見学後、ホールに戻り協議を再開した。

【意見交換：常設展示・設備更新】

（海瀬委員）歴史博物館と比較して機器の不調や劣化を感じる。予算面の理由か質問した。

（岡村館長）電子機器は少なくとも10年が目安で保証は5年程度、現在は更新時期を過ぎており維持が難しくなっている。開館当初は不調が少なかったが、当時OSがXPで一括導入したため更新が困難になった経緯がある。次に導入する際は一括ではなく分散する等の検討が必要。電子機器だけでなく、垂直展示の改善や史跡整備と展示内容の不一致、どこから人を入れるのか等の課題があり、方向性を決めたい。予算確保ができていない点も事実であり、委員から意見を伺いたい旨述べた。

（堀切会長）細部の課題はあるが、まずは前提となる理念・方針から議論を始めることが重要と述べた。

（田宮委員）基本理念は良いが、学生は必ずしも歴史に興味がない。現代の生活とどう結びつき、未来にどう生きるかを打ち出してほしいと述べた。

（藤田委員）理念の中で『現在地』を捉えることが大切。目の前の出土遺物や家があった事実から暮らしが見えた時に登呂の良さが伝わる。歴史に興味がない人が来ることが重要で、ジャンボタニシのように『来たい』と思える場所であることも理念に含められると他と違う博物館になれると述べた。

（村野委員）主語が『博物館』ではなく『地域社会』へ移る流れがある。登呂を誇りに思うことで何が変わるのか、来館者（市民）がどう変化を起こすのかまで書き込むこと

が重要であり、国際的にもそこを目指さない博物館は博物館ではないという潮流があると述べた。

【空気環境に関すること】

(渡邊主任主事) 他館から国宝・重要文化財を借用展示する際の53条公開手続きと公開承認施設の概要、当館の常設展示室・企画展示室の温湿度変動と有害ガス(アンモニア、有機酸、ホルムアルデヒド等)の課題、短期・中期・長期の対策(吸着シート、運用改善、ケース改修、除湿・空調設備更新等)を説明した。

(堀切会長) 文化財を守るため避けられない課題であるとして委員に質問を求めた。

(村野委員) 公開承認施設は重要だが、どのような展示品(国宝・重文)を想定するのか質問した。

(事務局:岡村館長) 借用資料は考古遺物が中心である旨、登呂博物館は登呂遺跡の情報発信が中心であり、公開承認施設は一つの方向性だが承認は簡単ではない旨述べた。

【デジタルコンテンツに関すること】

(事務局:松原主任主事) 国庫補助事業による発掘調査記録等のデジタルアーカイブ化と公開(I. B. Museum等)およびJapanSearch連携の予定、産業政策課の簡易検証事業で復元建物の3Dモデル化を試作していること、学校端末で教材として使える形であれば出前講座の補完や来館の導入になり得る旨説明した。

(村野委員) 来月実施のワークショップ(ニコン技術協力)では、物体の3D化に加え、動く人(踊り等)の3D化により無形文化の継承にも活用できる。技術進化が早く、VRから生成AIへ潮流が移っている。市の内部や企業と連携し、博物館内に留まらず地域社会の中でのデジタル活用も含め考えるべきと述べた。

(事務局:松原主任主事) デジタル導入は博物館だけでは収まらないため、庁内部局(DX推進課等)とも調整し、統括的に進められる枠組みの中で検討したいと述べた。

(田宮委員) 学校に持って行けるVR等は来館の導入になる。撮影者の主観に依存するビデオより、自分の見たい角度で見られることが魅力。間接体験と直接体験の整理、直接体験につながる設計が重要と述べた。

(事務局:松原主任主事) 市内の全小学生が端末を持つ現状から、手元端末で操作できる教材は利便性が高い。3D化した資料は観察を助け、本物を見に来る動機づけにもなる。教育委員会とも調整を進めていると述べた。館内への導入にあたっては、デジタルでひきつけるのではなく実物(資料)を見てもらうためのアプローチにデジタルを導入しようと検討していると補足した。

(藤田委員) 実物+イメージの組合せで体験型にすること、何を体験してもらうかのストーリー設計が重要と述べた。

(海瀬委員) 不登校の子どもが増え、博物館に行く体験が難しい子へのアプローチとして電子的な疑似体験は有効ではないかと述べた。

(田宮委員) 不登校でもミュージアムジャックには来られるケースがある。先生方への指導プロセスを示し、活用方法を考える必要があると述べた。

(村野委員) 海外(カナダ)では『博物館浴』を処方箋のように、メンタル面のケアとして博物館を活用する取組がある。予算確保の候補にもなり得ると述べた。

(事務局：松原主任主事) デジタルコンテンツの導入にあたっては、デジタルの内容だけに注視するのではなく出前講座や教職員との連携など、館と来館者の間にも配慮しながらより活用できる方法を模索していくと述べた。

(堀切会長) オープンソース・サンドボックス型のオンラインゲームの活用、VR・ARや生成AIの活用が進む時代に入り、基本方針に基づき何をするかを整理する必要がある。理念の検討は次回以降も継続する旨まとめた。

【閉会】

事務局より、次回(令和8年度第1回協議会)は7月頃の開催を予定し、日程は改めて調整する旨説明の上、閉会した。